

要約

現代における「奇想の系譜」の位相 -村上隆・五百羅漢図を基軸に-

浅野 幸治

2011.3.11 東日本大震災の後に制作された現代芸術家村上隆の《五百羅漢図》(以下、村上羅漢図)は、漫画やアニメと「日本画」的な造形を駆使した全長 100m の「巨大壁画」であり、「社会と芸術」の記念碑的な作品で日本の文化歴史の「かつてない道標」とも評された。村上芸術に対し「称賛と拒絶」といった両極端な社会的受容の中、道標とは、何をもって評価するのか、明確なメルクマールが求められる。

また、「奇想の系譜」(辻惟雄)は、近年の「日本画」への関心の高まりに社会的に大きく影響しており、その「奇想」の奇矯で幻想的なイメージやエンターテインメント性の概念は、江戸期という時代特有のものではなく、漫画やアニメなどの「最も先端的な造形」が氾濫する現代においても通底する存在ではないのだろうか。

本論文では、村上羅漢図が、日本の芸術文化の視座の中で、江戸時代を乗り越えて「現代の奇想の系譜」を体現しているという仮説に基づき、一つは主題・造形・手法などフレーム構造や時間・空間軸を踏まえた芸術作品の位置と共に、もう一つは「奇想の系譜」とスーパーフラットの造形面および現代アート理論に基づく関係面との様相から多面的な位相を論じ、村上芸術が時代を乗り越える現代アートとして切り拓いた地平を明らかにするものである。

<村上羅漢図の位置と村上芸術の変容>

災害が何時起こっても不思議でない日本。悲惨な災害を直視し、それを芸術として表象する人間的な対応は、精神的にも苦痛と困難が伴うものであり、「表象不可な問題」とも言われている。しかし、村上羅漢図は、災害や危機に対峙する芸術として社会との関係性を強め、五百羅漢を通じて人と寄り添い、生きている人々の相互の対話を通じ、未来に向けての展望を描いていくこと＝<もうひとつの歴史意識>として、災害と芸術の新たな表象を実現した。

また、村上羅漢図は、中国の神話で東西南北を司る四神霊獣を基本構造に、異様な形相の十六羅漢を核に五百もの羅漢を濃密な色彩と表現力により大群像として配置し、旧来の羅漢図とは根本的な形式が異なる新たな巨大壁画である。また、宗教画ではなく群像表現を核にしたイリュージョン効果をもたらすエクスポジションへの転換により、新たな視覚・感覚を追求する異化世界を造形化した。さらに、戦後日本の表象芸術としての進化や現代性の核心となる要素により、大震災を契機とした日本の芸術の変局点としての位置を定め、「かつてない道標」へと到達したものである。

<村上羅漢図と現代の「奇想の系譜」の位相>

村上羅漢図は、ユーモラスで異様な霊獣と多彩な羅漢の集う奇矯でエンターテインメントな「陰」と「陽」の多様な空間の表出により、奇想の特徴を現代的に昇華すると共に、「奇想の系譜」が現代にも通底していることを考察した。さらに村上羅漢図は、アニメやCGの概念を駆使した火炎光線や宇宙など四千枚のシルクスクリーンの背景と群像を合成し、平面性の中にカタストロフな深度を生み出し、また羅漢などのキャラクターをアートの中心に据え、多彩な変化や増殖の表象により、「日本画」の古典的な伝統をサブカルチャーとも融合し、スーパーフラットをも超えた「奇想の系譜」の現代版として登場したものである。

さらに、村上羅漢図の現代的な特徴は、辻「奇想の系譜」論の造形や作家の視点のみでは把握できないことから、現代アートの文脈の中で表象環境・空間や鑑賞者との関係を踏まえた新たな考察をすべき点にある。村上羅漢図は、鑑賞者とアーティストの役割の変貌という現代アートの2つのパラダイムシフトを踏まえ、鑑賞者をも包み込む現代アートの空間構造の創出と共に、アーティストとして大震災という危機に「コンセプチュアルに社会に対峙」することにより生と死の対話モデルにより実現したものである。それは現代アートのキーワードの「シンクロニシティ（共時性、共感性）」を呼び起こし、社会の中に共鳴し拡張する3.11以降の現代アートの新たな流れの創出につなげている様相を明らかにした。

本論文では、村上羅漢図が、絶望と希望が隣接する危機に、大震災と五百羅漢をテーマに現代アートで社会に対峙する「コンセプト」を踏まえ、異様な形相の羅漢や生きものの造形表象をエクスポジションされた異化空間に創出することで、誰もがはじめての衝撃的、感動的な体験を与えた「インパクト」、日本の古典絵画から現代の漫画・アニメ・CGなどヴィジュアル文化の集積など多層の「レイヤー」に織り込み、現代アートの動機の重層的な連関により、自然と人々との関係性を強め、社会の中に共鳴し拡張していく「現代アートの在り方」を提示した。

日本の芸術家としては、奇想の系譜の一人である北斎が「世界のHOKUSAI」として海外でよく知られている。村上羅漢図が切り拓いた「現代における奇想の系譜」としての位相は、「日本の美」を地域と時代を超えて伝える現代アーティスト＝「世界の村上隆」への、変局点につながるものではないだろうか。